大学新入生における調査能力とプレゼンテーション能力の育成
—風景印を用いた平成15（2003）年度「基礎セミナー（社会文化）」における実践例—

香川貴志
（京都教育大学）

Bringing up Ability of the Investigation and Presentation for University Freshmen: In the Case of Fundamental Seminar for "Social and Culture Class"

Takashi KAGAWA

抄録：京都教育大学では，大学における新入生への導入教育として「基礎セミナー」を平成9（1997）年4月から実施している。当科目は，新入生の全員が系・専攻・コース等に分かれて1回生の前期に受講する必修科目であり，系・コース・専攻の事情に応じて担当教官が内容を工夫することになっている。そのため，授業の内容は多彩であるが，共通して「大学での研究や学習の動機付け」が目標に盛り込まれている。本稿は，当科目を一層充実させるための参考資料として供するべく，平成15年度における「基礎セミナー」の実践について，社会文化専攻のクラスを例として記録したものである。

キーワード：大学新入生，調査能力，プレゼンテーション能力，風景印，基礎セミナー

Ⅰ　はじめに—基礎セミナーの導入と実施形態—

大学における基礎教養科目が軽減される一方，専門教育への一層のシフトが必然的に強くなった。しかしながら，大学で研究や学習を進めるに際して，いかなる方法で取り組めばよいのかを明確に見出せない学生たちが少なからずいることも事実であろう。このことは，大学における有意義な研究・学習活動を促すために何らかの支援が必要になる所以である。京都教育大学では，こうした時流のなか，新入生が大学で学ぶ意義を積極的に見出し，そして彼らがそれを実践に移していけるように，平成9（1997）年度から1回生の前期に必修科目「基礎セミナー」を設置している。ただ，当科目の全般について詳しく述べるのは本稿の目的ではないので，ここでは導入目標の概略を上述程度の記載にとどめ，著者の所属する社会科学科の教官が関わる「基礎セミナー」について，その実施形態を整理しておきたい。

さて「基礎セミナー」では，各学生が自らの所属する系・コース・専攻に応じて指定クラスと指定時間で受講することになる。著者が所属する社会科学科の教官が担当者となっているのは，学校教育教員養成課程の「言語・社会教育系」，総合科学課程の「環境学コース」，および本稿で実施内容を詳述する「社会文化専攻」である。このうち「言語・社会教育系」は，主に社会科教育，国語科教育と英語科教育に進む学生が所属しているため，社会科学科・国文学科・英文学科から各1名の担当教官が出され，クラスも3つが設定される。学生たちは，オムニバス形式で3名の教官から「基礎セミナー」を受講することになる。教官1名の担当時間数は，クラス毎に4～5コマである。このようにして特定分野に偏った受講とならないような工夫が施されている。

次に「環境学コース」は，平成12（2000）年の改組でできたコースで，その運営には理学科（全分野），家政科（全分野），そして社会科学科（地理学，経済学，哲学・倫理学）が携わっており，個別入学試験（二次試験）では文系型と理系型の教科科目を選択できる。学生たちは2回生時に自然環境学専攻，生活環境学専攻，地域環境学専攻に分属するが，それぞれ理学科，家政科，社会科学科の教官が上回生時における演習などの専門科目を担当している。当コースの「基礎セミナー」は4クラスが設定されており，理学科の教官が2クラス，家政科の教官が1クラス，社会科学科の教官が1クラスを担当している。学生たちのクラス分けは学生番号順で機械的になされるため，各クラスの人数に偏りは生じないが，個々の学生が希望通りのクラスに所属できるわけではない。オムニバス形式ではないため，半期にわたる授業内容と授業計画の立案が必要であり，担当教官は授業の成否が反映さ

れ易いハイリスク・ハイリターン型であることを覚悟しなければならない。

これら2つの系・コースに対して,「社会文化専攻」は社会科学科に関わる諸分野に進む学生たちから構成されており,その意味では専門分野に対する志向が比較的均質であるといえる。そこで,1名の教官が半期を通じて1つのクラスを担当する運営がなされている。オムニバス形式ではないため,担当教官は「環境学コース」と同様にハイリスク・ハイリターン型であることを自覚しておく必要がある。授業内容や授業計画の難しさについて記せば,学生たちの志向が比較的均質であるとはいえ,仮に高等学校の教科に例えれば,彼らの希望領域が公民科と地歴科の双方に分散するだけでなく,希望分野(高等学校での科目あるいは大学での専門領域)が,哲学,倫理学,政治学,法律学,経済学,社会学,地理学,日本史学,外国史学の多岐に及ぶことを認識しておかねばならない。つまり,担当教官の専門分野のカラーを授業計画に色濃く盛り込むことは,可能な限り避けた方が賢明であるといえる。

II 授業内容と授業計画の立案—のべ3回の記録—

前章で述べたように,「社会文化専攻」の学生たちを対象とした「基礎セミナー」では,担当教官の専門分野を強く打ち出すことが求められない。しかし一方で,担当教官の専門分野のカラーが全く感じられない授業をしても,大学に入学して間もない学生たちの学習意欲や知的好奇心を刺激できないことは自明のことである。そこで著者は,過去3回の「基礎セミナー」担当の際に,調査能力とプレゼンテーション能力の育成に主眼を置き,自らの専門分野である人文地理学を親しみ易いように加工しつつ盛り込んでみた。

1 第1回目担当(平成9年度)の記録

この年度には,現在の系・コース・専攻とは若干異なる学生募集単位であった「初等文系」クラスを担当した。「初等文系」は,主に社会科学科と国文学科に学生たちが進む初等教育教員養成のクラスであったが,改組実施に伴って社会科学科と国文学科が別個に教員養成課程の学生募集を行い,合格発表は両学科を合わせた「初等文系」を単位として実施するという極めて変則的な移行措置が採られた。それゆえ,「初等文系」には「文国」と「文社」という2つの「基礎セミナー」クラスが設けられ,前者は国文学科,後者は社会科学科の教官が担当することになった。学生たちは入学試験出願時の希望に応じて分属した。しかし,あくまで専攻のまとまりは「初等文系」であったため,「文国」クラスの学生が社会科学科に進む可能性もあれば,逆に「文社」の学生が国文学科を希望する可能性もあった。

このような複雑な事情の下で,「基礎セミナー」においては社会科学科のカラーを出しつつも専門性が過度に出ない工夫が求められる点で,現在の「社会文化専攻」に類似した心構えが必要であった。そこで,半期の授業を前半と後半に分け,前半では予め選定した伏見区内の複数のランドマークを個人またはグループに選ばせたうえで,そのランドマークに関する概要(歴史や文化など)を現地調査や文献調査に基づいて報告させ,報告内容について質疑応答を行った。ランドマークには,藤森神社,伏見インクラインと墨染発電所,大倉記念館,伏見港公園,京都競馬場などを選定しておいた。また,半期の授業の後半では,京都市内の創作菓子店を個人またはグループに自由に選ばせたのち,その創作菓子店の特徴(沿革や主要商品のチャームポイントなど)を店舗での聴き取り調査や文献調査に基づいて報告させ,当該店舗から買ってきた創作菓子をクラス構成員で試食しながら質疑応答を行った。受講学生が教員養成課程(平成12年度以降の入学生における学校教育教員養成課程に相当)の所属であるため,プレゼンテーションの際には話題にうまく引き込む工夫をするよう促した。これは将来において学生たちが教壇に立つことを前提としたものである。

著者にとっては初めての経験で難しい授業であったが,各々の報告に対して専門分野である人文地理学の特性を活かしたコメントをしつつ,そのカラーを出し過ぎないようにする訓練は積めたように思う。ただ,グループでの報告の場合は,個々人が他のグループ構成員に大きく依存し,ほとんど報告へ向けての作業に関与しない学生もいたようであり,このことが最大の反省点として残された。

2 第2回目担当（平成13年度）の記録

この年度には，本稿で扱う平成15年度クラスと同じ「社会文化専攻」を担当した。当専攻は，いわゆるゼロ免コースである総合科学課程の学生たちから成るクラスであり，学校教育教員養成課程の学生諸君と比較すれば，専門志向が若干強いことが想定される。そこで，専攻名と同じ「社会文化」全般に対して興味や関心を持てるようなテーマを模索した。著者の専門分野の知識を活用しつつも一層広い視野に立った授業を構築するため，まず調査対象を郵便局の風景印（正式名称は「風景入通信日付印」）とした。風景印は，全国の主な郵便局に設置された消印の一種であり，そこには郵便局所在地周辺の風物が描かれている。著者が調査や私的な旅行の折に収集してきた実績もあるため，学生たちへの指示がやり易いこともテーマ選定の根拠の一つとなった。近年において発行された風景印収集に役立つ書籍[1) 2) 3)]，風景印に関するヒット数の多いホームページのアドレス[4) 5) 6)]を文献欄に列挙しておいた。

最初の講義の際に，京都市内で風景印のある郵便局のリストを提示して，授業1回あたり3～4名の学生を報告者として決定した。各学生は，相互に重複しないよう調整した郵便局から風景印を収集して，その風景印に描かれた風物について調べてB4版の資料（風景印の印影を掲載）にまとめ，報告と質疑応答を行うことになる。報告回数は半期に2回となったが，1回目に比べて2回目は格段に進歩する様子が実感できた。しかし，各報告に対する質疑が全般的に低調で，特定の学生からの質疑が大勢を占めた。それゆえ，著者の専門分野からの補足説明が多くならざるを得ない状況がしばしば生じた。学生たちが相互に溶け込まないままに本格的な少人数授業に取り掛かったため，質疑をしにくい雰囲気があったと想定され，次回への懸案事項として記録に留めておいた。

3 第3回目担当（平成15年度）の記録

担当したクラスは「社会文化専攻」である。詳しくは次章に譲るが，平成13年度に準拠してテーマには風景印を選んだ。テーマ選定の趣旨も平成13年度と同様である。風景印を扱うこと自体は，その後も印影の収集をしている学生が少なからずいるなど，平成13年度の受講生からも概ね好評であったためである。ただ，平成13年度の授業から得た懸案事項の解決を積極的に図る必要があった。そのため，前回は作成しなかったクラス構成員の名簿と自己紹介を兼ねた小冊子“Profile”を作成することにした。各種ガイダンスの折に自己紹介原稿を最初の授業（4月14日）までに提出するよう求め，これを小冊子にまとめた後に2回目の授業（4月21日）で記載内容に従った自己紹介をさせた。各メンバーの横顔が良く分かる小冊子が手元にあったため，自己紹介は驚くほど盛り上がり，これによってクラス構成員の相互理解が進んだ。それが，各学生による報告の際に活発な質疑応答へ結びついたことは説明するまでもない。

III　授業の実施と経過—平成15年度における実践例—

新年度を迎えた最初の「基礎セミナー」は4月14日に実施した。この前週の同曜日（7日）が入学式であったため，その翌日8日からの4日間で各種ガイダンスがあり，そこでも学生諸君と顔を合わせる機会があったが，「セミナー」の立ち上げにあたって簡単な自己紹介をさせた。いわゆるハッピーマンデーの施行以来，月曜日の授業が不足しがちである例に漏れず，平成15（2003）年度も前期は13回の授業設定となっていたため，「基礎セミナー」の趣旨説明，テーマに選んだ風景印の説明とに続けて，発表順や調査対象郵便局の調整を早速に行った。風景印の説明では，変形印を含む実例（図1）を提示し，テーマに親しんでもらう工夫を施した。既に風景印の存在を知っていたか否かを問うと，既知の者は20名中で1名に過ぎなかった。調査対象郵便局の調整に際しては，シラバスに示した参考図書から京都市内所在の郵便局に関わる部分を複写して学生に配布し，出身地が遠い者などが相互に調整し易いように配慮した。加えて，この日は新入生の受講登録押印でもあったので，受講相談や押印にも応じた。第1回目の授業以降の授業計画（実際に当計画どおりに進行）は表1に示した。ただ，シラバス執筆時点では受講生の数（入学者の数）を把握することが不可能であるがゆえ，表1の授業計画とシラバスの授業計画は若干異なっている。

第2回目の授業は，プレゼンテーションに不慣れな学生が多いと想定されるため，担当者によるモデル・プレゼンテーションを実施した。その際に配布した資料は図2のとおりである。こうした授業内容に加えて，平成13（2001）年度「基礎セミナー」での反省から取り入れた自己紹介冊子“Profile”を配布し，前章末に記したような授業展開を図った。

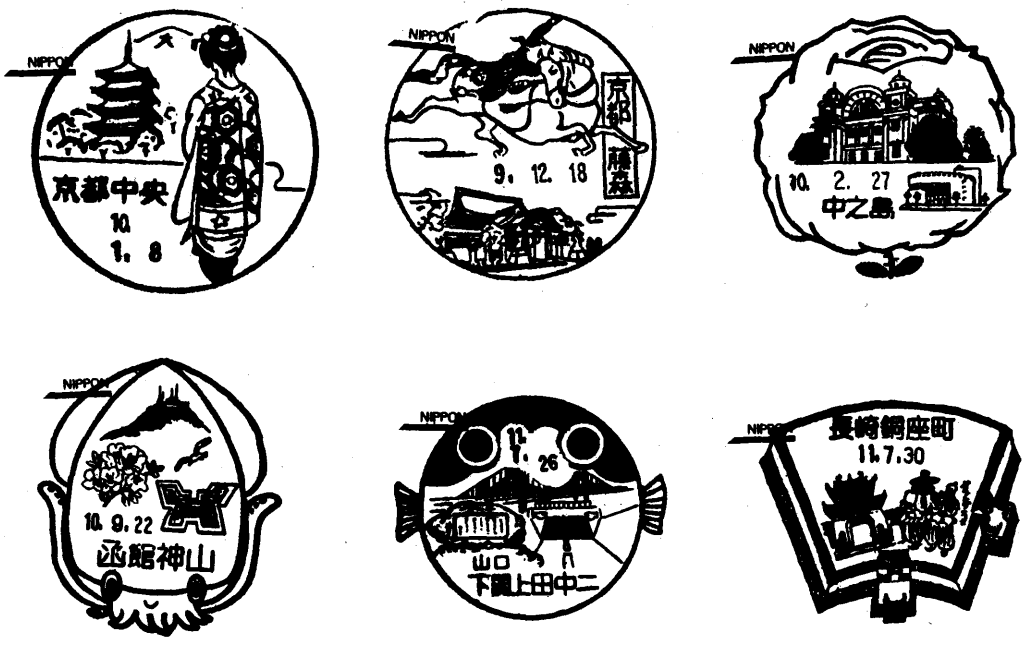


図1 初回の授業において風景印の説明に使用した配布資料（一部抜粋）

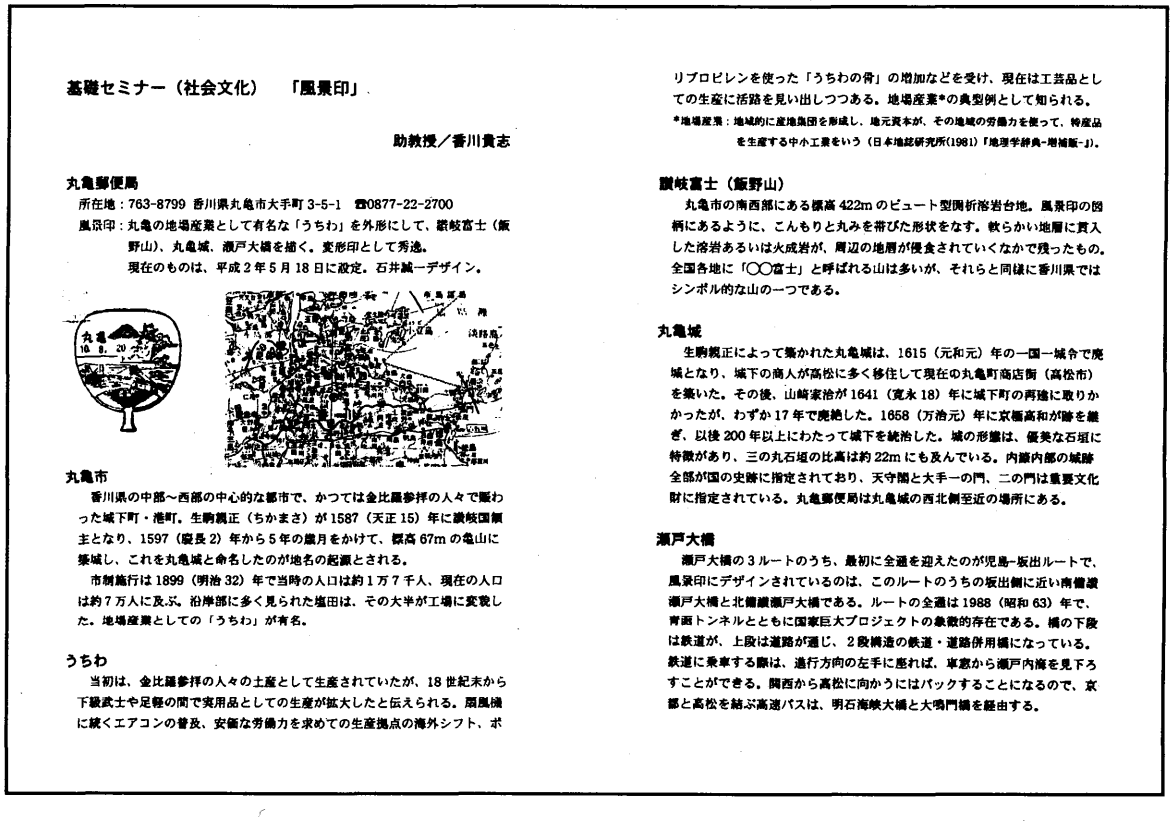
注）掲載した大きさは原寸大。左上から横方向の順に，京都中央郵便局（京都市下京区），京都藤森郵便局（京都市伏見区），中之島郵便局（大阪市北区），函館神山郵便局（北海道函館市），山口下関上田中二郵便局（山口県下関市），長崎銅座町郵便局（長崎県長崎市）の風景印。各印影をみると，各地の文化や風物をうまく凝集表現していることが分かる。印影の輪郭が円形でないものは変形印と呼ばれ，コレクターからの人気が高い。中之島郵便局のものは大阪市北区の花であるバラ，函館神山郵便局のものは名産品であるイカ，山口下関上田中二郵便局のものも同様に名産品のフグ（現地ではフクと呼称される），長崎銅座町のものは出島が各々ユーモラスに描かれている。

表1 平成15年度「基礎セミナー（社会文化）」の授業計画

日 付	授 業 の 内 容
4月14日	基礎セミナーの趣旨説明，風景印の説明，簡単な自己紹介，発表順等の決定，受講登録相談・登録押印など
4月21日	モデル・プレゼンテーション（担当者（香川）による実演），“Profile”に基づく自己紹介
4月28日	学生によるプレゼンテーション（1巡目・第1回，4名）
5月12日	図書館利用ガイダンス，学生によるプレゼンテーション（1巡目・第2回，2名）
5月19日	著者（香川）の学会出張・調査出張のため休講。4月中に適宜質問を受けることで代替とした。
5月26日	学生によるプレゼンテーション（1巡目・第3回，4名）
6月 2日	学生によるプレゼンテーション（1巡目・第4回，4名），2巡目の発表順等を決定
6月 9日	学生によるプレゼンテーション（1巡目・第5回，4名）
6月16日	学生によるプレゼンテーション（2巡目・第1回，5名）
6月23日	学生によるプレゼンテーション（2巡目・第2回，5名）
6月30日	学生によるプレゼンテーション（2巡目・第3回，5名）
7月 7日	学生によるプレゼンテーション（2巡目・第4回，5名）
7月14日	反省会，夕刻から「基礎セミナー」打ち上げの懇親会

第3回目からは受講生による第1巡目のプレゼンテーションとした。受講生は20名であったが，そのうち2名は留学生であり，彼女らに日本人学生と同様のプレゼンテーションを課すのは負担過重になると考えた。そこで，第1巡目は日本人学生18名によるプレゼンテーションを設計し，留学生2名には聴講しながらプレゼンテーションや質疑の雰囲気に慣れてもらうようにした。授業1回あたりの発表者数は4名を基準にしたが，各専攻やコースにローテーションで配置される「図書館利用ガイダンス」が5月12日の授業日に設定されたため，この日はガイダンスに続けて変則的に2名の発表とし，残り4回で計16名の発表を配置した。途中，5月19日は担当者の学会出張・調査出張が予め入っていたため休講を措置，この代替は4月にオフィスアワーを拡充して対応した。また，2巡目のプレゼンテーションへ速やかに入れるように，1巡目の第4回（第5回が1巡目の最終）に2巡目の発表順と調査対象郵便局の調整を行った。

こうした一連の1巡目プレゼンテーションでは，表2に示すように京都市内の郵便局を調査対象にした者が目立った。京都府下を出身地とする学生2名と留学生2名を除いた他府県出身学生16名のうち，京都市内の郵便局を調査対象に選定した受講生は8名に及ぶ。一方，出身地近くの地元郵便局を調査対象に選ぶ者は，ゴールデンウィーク後のプレゼンテーション組から徐々に増えてきた。受講生が授業に慣れてくるにつれ，質疑応答も盛んに交わされるようになってきた。質疑応答は，総じて発表者の出身地近くの地元郵便局が対象となったケースでより活発であった。各々の発表の後では，発表内容に対するコメントとともに，必要に応じて調査技法（聴き取り調査の方法，図書館やインターネットの活用など）を教授し，質疑を促しながらプレゼンテーションをめぐるマナーの伝授にも努めた。参考までに，1巡目プレゼンテーションにおける配布資料の一例を図3に示した。



基礎セミナー（社会文化）　「風景印」

助教授／香川貴志

丸亀郵便局

所在地：763-8799 香川県丸亀市大手町 3-5-1　☎0877-22-2700

風景印：丸亀の地場産業として有名な「うちわ」を外形にして、讃岐富士（飯野山）、丸亀城、瀬戸大橋を描く。変形印として秀逸。
現在のものは、平成２年５月 18 日に設定。石井誠一デザイン。

丸亀市

香川県の中部～西部の中心的な都市で、かつては金比羅参拝の人々で賑わった城下町・港町。生駒親正（ちかまさ）が 1587（天正 15）年に讃岐国領主となり、1597（慶長 2）年から５年の歳月をかけて、標高 67m の亀山に築城し、これを丸亀城と命名したのが地名の起源とされる。

市制施行は 1899（明治 32）年で当時の人口は約１万７千人、現在の人口は約７万人に及ぶ。沿岸部に多く見られた塩田は、その大半が工場に変貌した。地場産業としての「うちわ」が有名。

うちわ

当初は、金比羅参拝の人々の土産として生産されていたが、18 世紀末から下級武士や足軽の間で実用品としての生産が拡大したと伝えられる。扇風機に続くエアコンの普及、安価な労働力を求めての生産拠点の海外シフト、ポリプロピレンを使った「うちわの骨」の増加などを受け、現在は工芸品としての生産に活路を見い出しつつある。地場産業*の典型例として知られる。

*地場産業：地域的に産地集団を形成し、地元資本が、その地域の労働力を使って、特産品を生産する中小工業をいう（日本地誌研究所(1981)『地理学辞典-増補版-』）。

讃岐富士（飯野山）

丸亀市の南西部にある標高 422m のビュート型開析溶岩台地。風景印の図柄にあるように、こんもりと丸みを帯びた形状をなす。軟らかい地層に貫入した溶岩あるいは火成岩が、周辺の地層が侵食されていくなかで残ったもの。全国各地に「○○富士」と呼ばれる山は多いが、それらと同様に香川県ではシンボル的な山の一つである。

丸亀城

生駒親正によって築かれた丸亀城は、1615（元和元）年の一国一城令で廃城となり、城下の商人が高松に多く移住して現在の丸亀町商店街（高松市）を築いた。その後、山崎家治が 1641（寛永 18）年に城下町の再建に取りかかったが、わずか 17 年で廃絶した。1658（万治元）年に京極高和が跡を継ぎ、以後 200 年以上にわたって城下を統治した。城の形態は、優美な石垣に特徴があり、三の丸石垣の比高は約 22m にも及んでいる。内部内部の城跡全部が国の史跡に指定されており、天守閣と大手一の門、二の門は重要文化財に指定されている。丸亀郵便局は丸亀城の西北側至近の場所にある。

瀬戸大橋

瀬戸大橋の３ルートのうち、最初に全通を迎えたのが児島-坂出ルートで、風景印にデザインされているのは、このルートのうちの坂出側に近い南備讃瀬戸大橋と北備讃瀬戸大橋である。ルートの全通は 1988（昭和 63）年で、青函トンネルとともに国家巨大プロジェクトの象徴的存在である。橋の下段は鉄道が、上段は道路が通じ、２段構造の鉄道・道路併用橋になっている。鉄道に乗車する際は、進行方向の左手に座れば、車窓から瀬戸内海を見下ろすことができる。関西から高松に向かうにはバックすることになるので、京都と高松を結ぶ高速バスは、明石海峡大橋と大鳴門橋を経由する。

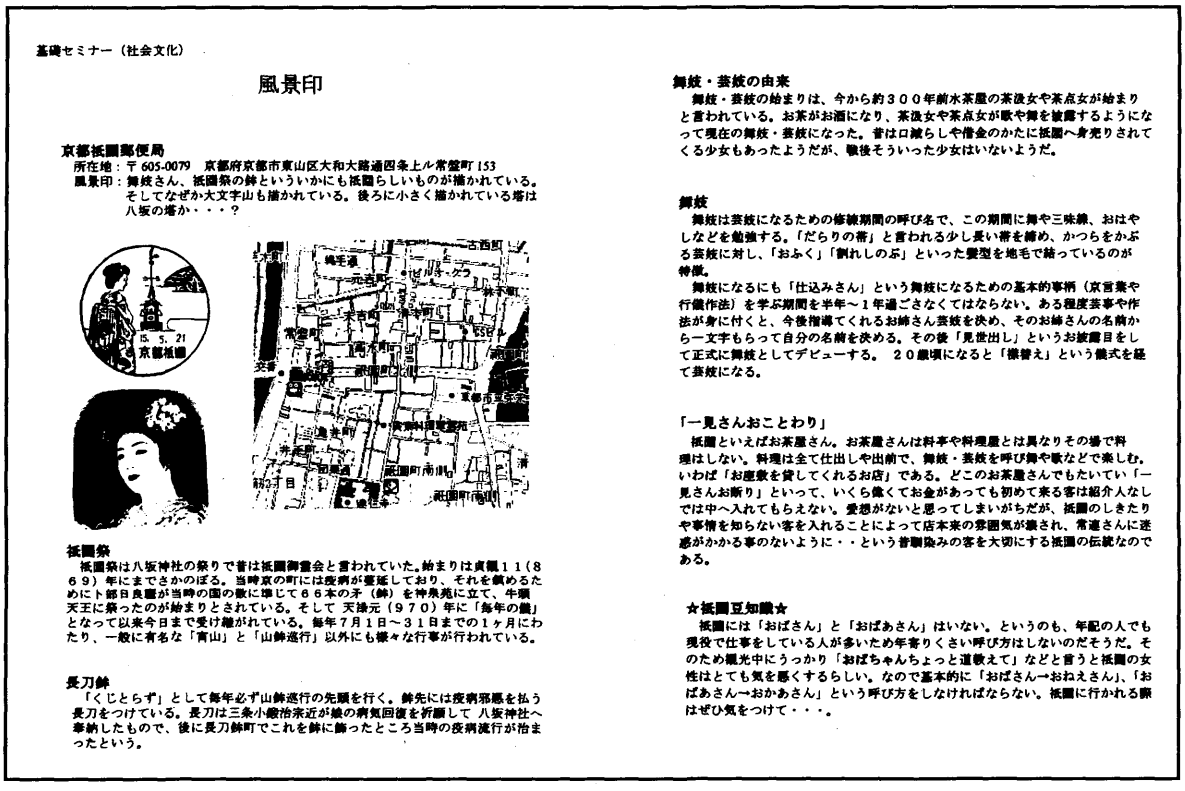
図２　第２回の授業のモデル・プレゼンテーションの際に配布した資料

注）およそ 45%の大きさに縮小している。地場産業の産品である「うちわ」を表現した変形印である丸亀郵便局（香川県丸亀市）の例。

全体の折り返し点を過ぎた6月9日から2巡目プレゼンテーションに入った。上述のとおり，その2週間前から発表順等を決めていたので，難なく2巡目に移行することができた。受講生の慣れを考慮に入れて，2巡目では留学生2名を含む総勢20名を5名ずつ4回に分けた授業を設計した。調査の仕方，資料のまとめ方，プレゼンテーションの方法，そして質疑応答などについて1巡目と比べると，相当な上達が認められた。

調査対象となった郵便局の所在地をみると，京都府下を出身地とする学生2名と留学生2名を除いた他府県出身学生16名のうち，京都市内の郵便局を調査対象に選定した受講生は2名に過ぎない（表2）。こうした変化には，上述した質疑応答における盛り上がりの濃淡への反応，ゴールデンウィークにおける帰郷時のフィールドワーク，相互理解の進展とともに高まった出身地を良く知って欲しいとの気持ちなどが少なからず影響しているのであろう。ここでも，2巡目プレゼンテーションにおける配布資料の一例を図4に示した。

発表スタイルについては，B4サイズ1枚の資料を提出するという取り決めがあったことも手伝って，パソコンやプロジェクターを使用したプレゼンテーションは皆無であった。また，そうしたプレゼンテーションへの要望や質問も無かった。しかし，社会文化専攻の場合は，いたずらに発表の技術的側面を鍛えるよりも，それ以前の基礎的な部分（フィールドワークからデスクワークに至る一連の知的活動）に重点を置き，情報機器の操作技法などは別の機会に譲る方が適しているように思える。なぜなら，とりわけ文系の場合は全ての新入生が常時パソコンを自由に扱える環境にはないし，調査の難しさや楽しさ，あるいは質疑応答での駆け引きやマナーを体験しつつ身に付ける方が，以後の学習活動や研究活動の礎としてうまく作用すると考えられるからである。とはいえ，今後は受講生からの要望が多く出てくることも十二分に考えられるので，それに応え得る体制は整えておかなくてはならない。



基礎セミナー（社会文化）

風景印

京都祇園郵便局
所在地：〒605-0079　京都府京都市東山区大和大路通四条上ル常盤町153
風景印：舞妓さん、祇園祭の鉾といういかにも祇園らしいものが描かれている。そしてなぜか大文字山も描かれている。後ろに小さく描かれている塔は八坂の塔か・・・？

祇園祭
祇園祭は八坂神社の祭りで昔は祇園御霊会と言われていた。始まりは貞観１１（８６９）年にまでさかのぼる。当時京の町には疫病が蔓延しており、それを鎮めるために卜部日良麿が当時の国の数に準じて６６本の矛（鉾）を神泉苑に立て、牛頭天王に祭ったのが始まりとされている。そして 天禄元（９７０）年に「毎年の儀」となって以来今日まで受け継がれている。毎年７月１日～３１日までの１ヶ月にわたり、一般に有名な「宵山」と「山鉾巡行」以外にも様々な行事が行われている。

長刀鉾
「くじとらず」として毎年必ず山鉾巡行の先頭を行く。鉾先には疫病邪悪を払う長刀をつけている。長刀は三条小鍛治宗近が娘の病気回復を祈願して 八坂神社へ奉納したもので、後に長刀鉾町でこれを鉾に飾ったところ当時の疫病流行が治まったという。

舞妓・芸妓の由来
舞妓・芸妓の始まりは、今から約３００年前水茶屋の茶汲女や茶点女が始まりと言われている。お茶がお酒になり、茶汲女や茶点女が歌や舞を披露するようになって現在の舞妓・芸妓になった。昔は口減らしや借金のかたに祇園へ身売りされてくる少女もあったようだが、戦後そういった少女はいないようだ。

舞妓
舞妓は芸妓になるための修練期間の呼び名で、この期間に舞や三味線、おはやしなどを勉強する。「だらりの帯」と言われる少し長い帯を締め、かつらをかぶる芸妓に対し、「おふく」「割れしのぶ」といった髪型を地毛で結っているのが特徴。
舞妓になるにも「仕込みさん」という舞妓になるための基本的事柄（京言葉や行儀作法）を学ぶ期間を半年～１年過ごさなくてはならない。ある程度芸事や作法が身に付くと、今後指導てくれるお姉さん芸妓を決め、そのお姉さんの名前から一文字もらって自分の名前を決める。その後「見世出し」というお披露目をして正式に舞妓としてデビューする。 ２０歳頃になると「襟替え」という儀式を経て芸妓になる。

「一見さんおことわり」
祇園といえばお茶屋さん。お茶屋さんは料亭や料理屋とは異なりその場で料理はしない。料理は全て仕出しや出前で、舞妓・芸妓を呼び舞や歌などで楽しむ。いわば「お座敷を貸してくれるお店」である。どこのお茶屋さんでもたいてい「一見さんお断り」といって、いくら偉くてお金があっても初めて来る客は紹介人なしでは中へ入れてもらえない。愛想がないと思ってしまいがちだが、祇園のしきたりや事情を知らない客を入れることによって店本来の雰囲気が壊され、常連さんに迷惑がかかる事のないように・・という昔馴染みの客を大切にする祇園の伝統なのである。

☆祇園豆知識☆
祇園には「おばさん」と「おばあさん」はいない。というのも、年配の人でも現役で仕事をしている人が多いため年寄りくさい呼び方はしないのだそうだ。そのため観光中にうっかり「おばちゃんちょっと道教えて」などと言うと祇園の女性はとても気を悪くするらしい。なので基本的に「おばさん→おねえさん」、「おばあさん→おかあさん」という呼び方をしなければならない。祇園に行かれる際はぜひ気をつけて・・・。

図３　１巡目プレゼンテーションにおいて受講生が作成した配布資料の一例

注）およそ45％の大きさに縮小している。一部改変（個人が特定され易くなることに配慮して学生の氏名を消去）。シンプルな表現のなかに京都らしさが滲み出たデザインの京都祇園郵便局（京都市東山区）の例。

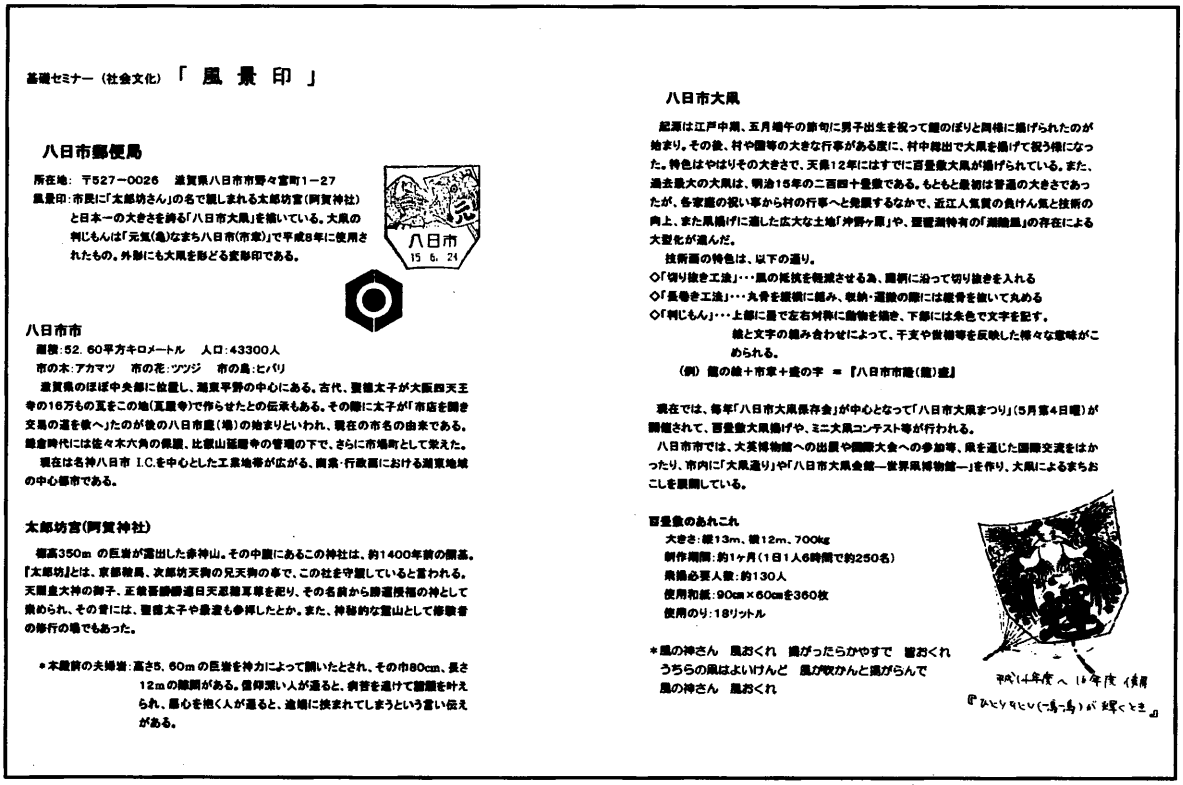
表2　平成15年度「基礎セミナー（社会文化）」所属学生の出身府県，および各学生が調査対象に選定した郵便局の所在地

出身府県＊	1巡目の調査対象郵便局	2巡目の調査対象郵便局	1巡目区分＊＊	2巡目区分＊＊
岩手県	京都伏見醍醐（京都市伏見区）	岩手重茂（岩手県宮古市）	京都	地元
茨城県	常陸小川（茨城県茨城群小川町）	大分由布院（大分県大分郡湯布院町）	地元	その他
群馬県	室田（群馬県群馬郡榛名町）	京都吉田（京都府左京区）	地元	京都
富山県	砺波（富山県砺波市）	高岡・高岡芳野（富山県高岡市）	地元	地元
滋賀県	京都北野（京都市上京区）	栗東（滋賀県栗東市）	京都	地元
滋賀県	竜王（滋賀県蒲生群竜王町）	八日市（滋賀県八日市市）	地元	地元
京都府	京都祇園（京都市東山区）	亀岡（京都府亀岡市）	京都（地元）	京都（地元）
京都府	京都弓削（京都府北桑田郡京北町）	京都美山（京都府北桑田郡美山町）	京都（地元）	京都（地元）
大阪府	京都由掛（京都市伏見区）	高槻（大阪府高槻市）	京都	地元
大阪府	京都西ノ京職司（京都市中京区）	大東（大阪府大東市）	京都	地元
大阪府	大阪中央（大阪市北区）	大阪城東（大阪市城東区）	地元	地元
大阪府	京都西洞院綾小路（京都市下京区）	河内長野（大阪府河内長野市）	京都	地元
大阪府	枚方（大阪府枚方市）	枚方東（大阪府枚方市）	地元	地元
兵庫県	京都三条大橋（京都市東山区）	神戸市中央（神戸市中央区）	京都	地元
兵庫県	京都伏見西浦（京都市伏見区）	姫路（兵庫県姫路市）	京都	地元
奈良県	橿原（奈良県橿原市）	奈良東向（奈良県奈良市）	地元	地元
鳥取県	米子（鳥取県米子市）	京都太秦一ノ井（京都市右京区）	地元	京都
島根県	伏見（京都市伏見区）	松江中央（島根県松江市）	京都	地元
中国・瀋陽	〔留学生のため1巡目は聴講のみ〕	京都藤森（京都市伏見区）	—	京都
中国・瀋陽	〔留学生のため1巡目は聴講のみ〕	京都清水（京都市東山区）	—	京都

資料：平成15年度「基礎セミナー」のクラス名簿“Profile”および各学生が配布したプリント

＊　留学生については出身国および出身都市。

＊＊（各区分の内容）「京都」は京都府内の郵便局，「地元」は出身府県の郵便局，
その他は京都でも出身府県でもない郵便局を扱った場合。



基礎セミナー（社会文化）「風景印」

八日市郵便局

所在地：〒527−0026　滋賀県八日市市野々宮町1−27
風景印：市民に「太郎坊さん」の名で親しまれる太郎坊宮（阿賀神社）と日本一の大きさを誇る「八日市大凧」を描いている。大凧の判じもんは「元気（亀）なまち八日市（市章）」で平成8年に使用されたもの。外形にも大凧を形どる変形印である。

八日市
15 6. 24

八日市市
面積：52．60平方キロメートル　人口：43300人
市の木：アカマツ　市の花：ツツジ　市の鳥：ヒバリ
滋賀県のほぼ中央部に位置し、湖東平野の中心にある。古代、聖徳太子が大阪四天王寺の16万もの瓦をこの地（瓦屋寺）で作らせたとの伝承もある。その際に太子が「市店を開き交易の道を敷へ」たのが後の八日市庭（場）の始まりといわれ、現在の市名の由来である。鎌倉時代には佐々木六角の保護、比叡山延暦寺の管理の下で、さらに市場町として栄えた。
現在は名神八日市 I.C.を中心とした工業地帯が広がる、商業・行政面における湖東地域の中心都市である。

太郎坊宮（阿賀神社）
標高350m の巨岩が露出した赤神山。その中腹にあるこの神社は、約1400年前の開基。『太郎坊』とは、京都鞍馬、次郎坊天狗の兄天狗の事で、この社を守護していると言われる。天照皇大神の御子、正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊を祀り、その名前から勝運授福の神として崇められ、その昔には、聖徳太子や最澄も参拝したとか。また、神秘的な霊山として修験者の修行の場でもあった。

＊本殿前の夫婦岩：高さ5．60m の巨岩を神力によって開いたとされ、その巾80cm、長さ12m の隙間がある。信仰深い人が通ると、病苦を逃げて諸願を叶えられ、暴心を抱く人が通ると、途端に挟まれてしまうという言い伝えがある。

八日市大凧

起源は江戸中期、五月端午の節句に男子出生を祝って鯉のぼりと同様に揚げられたのが始まり。その後、村や園等の大きな行事がある度に、村中総出で大凧を揚げて祝う様になった。特色はやはりその大きさで、天保12年にはすでに百畳敷大凧が揚げられている。また、過去最大の大凧は、明治15年の二百四十畳敷である。もともと最初は普通の大きさであったが、各家庭の祝い事から村の行事へと発展するなかで、近江人気質の負けん気と技術の向上、また凧揚げに適した広大な土地「沖野ヶ原」や、亜寒湖特有の「湖陰風」の存在による大型化が進んだ。
技術面の特色は、以下の通り。
◇「切り抜き工法」・・・風の抵抗を軽減させる為、鋼柄に沿って切り抜きを入れる
◇「長巻き工法」・・・丸骨を縦横に組み、収納・運搬の際には縦骨を抜いて丸める
◇「判じもん」・・・上部に墨で左右対称に動物を描き、下部には朱色で文字を記す。
絵と文字の組み合わせによって、干支や世相等を反映した様々な意味がこめられる。
（例）龍の絵＋市章＋盛の字　＝『八日市市隆（龍）盛』

現在では、毎年「八日市大凧保存会」が中心となって「八日市大凧まつり」（5月第4日曜）が開催されて、百畳敷大凧揚げや、ミニ大凧コンテスト等が行われる。
八日市市では、大英博物館への出展や国際大会への参加等、凧を通じた国際交流をはかったり、市内に「大凧通り」や「八日市大凧会館―世界凧博物館―」を作り、大凧によるまちおこしを展開している。

百畳敷のあれこれ
大きさ：縦13m、横12m、700kg
制作期間：約1ヶ月（1日1人6時間で約250名）
乗揚必要人数：約130人
使用和紙：90cm×60cmを360枚
使用のり：18リットル

＊風の神さん　風おくれ　揚がったらかやすで　皆おくれ
うちらの凧はよいけんど　風が吹かんと揚がらんで
風の神さん　風おくれ

平成14年度へ16年度使用
『ひとりなとり（一鳥一鳥）が輝くとき』

図4　2巡目プレゼンテーションにおいて受講生が作成した配布資料の一例

注）およそ45％の大きさに縮小している。一部改変（個人が特定され易くなることに配慮して学生の氏名を消去）。毎年5月の第4日曜日に開催される「八日市大凧まつり」の象徴を変形印で図案化した八日市郵便局（滋賀県八日市市）の例。

Ⅳ 授業の経験と成果—まとめに代えて—

以上のように平成15（2003）年度の「基礎セミナー（社会文化）」は進行した。本章では，授業評価アンケートの結果を適宜参照しながら，今回の授業を通じて得られた成果や反省点について整理し，今後に活用できる資料として情報の共有化を図りたい。

授業評価アンケートは6月30日に実施した。今回の「基礎セミナー」は学生のプレゼンテーションとそれに対するコメントが中心の授業であるので，後述する自由記述にもあるように回答しにくいと感じた受講生もいたようで，得られた回答数は16部であった。以下では，平成15年度授業評価アンケートにおける13項目の質問のうち，本稿で扱った授業実践に深く関わると判断される5項目を素材にして，成果と反省点を洗い出してみる。

まず，質問3で問われた「授業時間以外に，この授業のために費やした時間の平均は，一週間あたりどの程度ですか」に関してみると，「3時間以上」が4名，「1時間半程度」が5名，「30分程度」が5名，「ほとんどなかった」が2名であった。授業時間外に費やされた勉学時間は総じて長いが，「ほとんどなかった」という回答もあるため，各自の発表直前にごく簡単な調査や資料作成をしたに過ぎない受講生の存在が疑われる。新入生の導入的な科目である「基礎セミナー」では，こうした学生を積極的に学ばせる工夫が必要である。そのためには発表回数を増やすなどの密度向上が有効であろうが，他の学生のプレゼンテーションに対する感想文や自己のプレゼンテーションに対する反省レポートを課すことなども効果が期待できる。

学生の自己評価として注目される質問4「あなたは，この授業に意欲的に取り組みましたか」についてみると，「取り組んだ」が11名，「ほぼ取り組んだ」が5名で，これら以外の回答は無かった。受動的になりがちな必修の講義科目が多い新入生にとって，「基礎セミナー」は少し工夫すれば能動的に取り組める科目として位置づけることが可能であるといえる。質問が少ない受講生を指名して発問させるなどすれば，より理想的な結果に近付けることができよう。

担当者の専門分野のカラーを出し過ぎないように努めたため，授業レベルが低くなることが懸念されるが，質問5「あなたにとって，この授業のレベルはどうでしたか」では，「高すぎる」・「やや高い」・「易しすぎる」の回答が無く，「適当」が13名，「やや易しい」が3名を数えた。こと「基礎セミナー」に限っては，大学で学ぶ動機付けや意欲向上が重要であると考えられるので，おおむねレベル設定については穏当であった判断できよう。

テーマへの興味を問うた質問9「あなたは，この授業のテーマの学問領域や研究分野に興味をおぼえましたか」をみると，「大変興味をおぼえた」が9名，「いくらかおぼえた」が6名で，他の選択肢への回答は無かった。打ち上げの懇親会で数名の受講生から「知らない地域のことが良く分かった」「歴史や文化が反映された風景印に魅力を感じた」「電子メールも便利だが風景印のある絵葉書を受け取ると嬉しい」などの意見が得られたことを合わせると，担当者の専門分野である人文地理学に対する興味や関心というよりも，「擬似旅行での発見」に近いイメージでプレゼンテーションに参加していた様子が想像できる。

質問13「総合してふり返ってみて，あなたはこの授業にどの程度満足していますか」の結果をまとめると，「満足している」が10名，「だいたい満足している」が5名，「少し不満足である」が1名，「不満足である」の回答は無かった。総じて満足度は高いが，やはり「少し不満足である」の1名の理由が知りたいところである。しかし，自由記述回答は4名から得られたに過ぎず，「少し不満足である」と回答した受講生からのものは見出しにくかった。一層の授業改善のためには，授業評価アンケートの質問13における「少し不満足である」と「不満足である」について，求められる改善点を書いてもらうなどの方策が有効ではなかろうか。

最後に，自由記述評価の結果を列挙すると，「基礎セミナーの評価は授業評価に馴染まない」，「他の学生の発表も興味深く聞け，大変有意義だった」，「多くの地元トークが楽しかった」，「風景印を郵便局でもらい，自分で調べて発表するのはとても面白かった」という回答が得られた。仮に現在と同様の体制の「社会文化専攻」を担当する機会があれば，その際に同じテーマを設定して一層の授業改善に取り組むことも可能であろう。本稿で検討した改善点をそこで試行することで，また新たな課題を見出して授業の持続的発展を図らなければならない。

文献

1）財団法人郵便文化振興協会編（1996）『風景入通信日付印集 平成6年3月末日現在』財団法人郵便文化振興

協会，462p.
2）財団法人郵便文化振興協会編（1996）『風景入通信日付印集 追録 平成 6.4.1 ～ 8.3.31』財団法人郵便文化振興協会，74p.
3）武田　聡編・現行切手満月印の会監修（1997）『全国郵便局名録'98』鳴美，652p.
4）http://keshiin.com/「風景印と小型印の情報ページ」
5）http://www2e.biglobe.ne.jp/~woody/stamp.htm「切手と風景印のサロン」
6）http://www.7umi.com/「日本の切手と風景印」